ホシノウタ

幸村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホシノウタ

【Ｎコード】
Ｎ５９９２Ｘ

【作者名】
幸村

【あらすじ】
何の変哲もないごくごく平凡な主人公なのに
ある日を境にこれ以上にないくらい可愛い女の子に言い寄られて大変！？
総勢６人のヒロインの中から一人の恋人を選べるのか！？

～ハジマリノウタ～（前書き）

完全オリジナル小説で見ててホワホワできそうな恋愛小説を書けるように頑張ります！
独学で小説の勉強中なので「もっとこうしたほうが」って思う事があればドンドン教えてください！！

～ハジマリノウタ～

突然だが、皆は自分の秘密が誰かに露呈するような体験があるだろうか
母親に見つかるイヤラシイ本とか、密かに想いを寄せていた子への気持ちを友人にバラされたり。
誰にも秘密ってのはあると思う。

かく言う俺も他人には言えない秘密はある
当然「俺には封じられた力が…」とか厨二臭い事を言うつもりじゃない
だけどそれなりにヘビィな内容だ。
「何一人でブツブツ言ってんの？」
「読者にだ」
隣で俺の独り言（説明）を聞いていた妹の沙希
見た目は中学生（本人はコンプレックスみたいだけど）で俺の妹
栗色の淡い色をした髪で小柄な体格なのに更に幼さに拍車をかけている。

俺と同じ学校に通う生徒会役員だ。
我が妹ながら、鼻の高い妹だ。
「あのさ～そんなアブナイ事をブツブツ言ってるからいつも生徒会と風紀委員から目をつけられてるんじゃないの？ただでさえリョー兄ぃは笹本くんと一緒に危険人物扱いなんだから」
「なに、俺が危険人物！？それは誤解だぞ？ただ単に学校を楽しく過ごすことに協力的なだけだ」
「その協力が学校内で花火でナイアガラを強行されたら堪ったもんじゃないよ」

ちなみにリョー兄ぃ（兄と書いてにぃと発音するらしい）と言うのが俺

「ふ、俺たちの美学は常に敵が多いな良哉」
「わっ、お前はいつも突然出てくるな」
突然会話に入ってきた男は笹本鋼兵
サラサラに黒髪、肩付近まで伸ばした髪がサラサラ揺れる
ムカつく位にイケメンオーラが流れてる。
笹本は俺の通う笹本高校始まって以来の問題児である。
気付いたかも知れないが笹本は、この学校の理事長の息子でもある
全国模試でもトップクラスでイケメンでスポーツ万能で常に話題の中心なのに話すと残念イケメン男

「で、今日も赤坂兄妹は仲良く痴話喧嘩…と」
「な、何言ってるんですか笹本君」
顔を真っ赤にして俯く沙希
どうもこの手の冗談に免疫が無いようですぐに真っ赤になる
「お前殺されたいのか？」
俺は笹本の前に出る
「お前が俺をヤレるのか？」
不敵な笑みを浮かべ身構える笹本
武術はやった事は無いのだろうが様になる辺りが流石天才の名を欲しいままにする男
だが…———
「いや、ヤるのは俺じゃないぞ」
笹本はハッとして青ざめる
後ろには顔を真っ赤にしたままの沙希
「しまっ————」
「えっちぃのは良くないと思いますーーー！！」
沙希の鞄（全教科ノート入り）が笹本の顔面ＨＩＴ

「ごぼぁっ！！」
◎ささもと　に　９９９　のダメージ！！
◎ささもと　は　たおれてしまった！！

そんなテロップが見えた気がした。
「さらば強者（とも）よお前の事は忘れない」
そう言い残して俺は倒れた戦友を背に歩き出した。
「行くぞ妹よ」
「え、でも…笹本君が」
「奴に構うな、男には一人にしなくてはならない時もある」
俺は足早に歩を進めた。

遅刻するし

「よう、遅かったな」
学校に着くと笹本が教室で授業の準備をしていた
「いつも思うんだがお前って、瞬間移動ができるのか？」
「何を言うんだ、出来るわけがないだろう」
「ならお前のその移動速度―――」
言いかけると教室の扉がバシーンと開けられた
この荒々しい上にガサツな開け方は我がクラスの担任の朝比奈千鶴先生だった。
名前は可愛らしいのに滅茶苦茶豪快女なのは昔から変わらない

「うぃーっす！今日も遅刻無くこの学校に来てるなー関心関心！」
いつもジャージ姿で大きなバストはジャージ越しにも分かるほどバルンバルン揺れている
彼女に告って玉砕した先生&生徒は星の数らしい
いつも「好きな子がいるんで」と断るため振られた一団はその相手を袋叩きにしようと日夜捜索中らしい
「センセー」
手を挙げてみる
「んーなんだハーレム魔王」
「…暴れますよ」
なぜ俺がハーレムなんだ？
しかも魔王

「すまんすまん…で？なんだ？」
「先週俺休んでて身体測定受けて無かったんで、何時行けばいいっすか」
聞くとあーと唸って眉間にペンを押し当てて考える。
「そーだなー、じゃあ今からやるかー」
「え〝・・・」
クラス全体がざわつく
おもに男子が俺を睨む

すると沙希は手を挙げて意見する
「ちょ、保険の先生は今日出張ですよ？」
「知ってる知ってる、あたしが代わりにやるから」
ケラケラ笑いながら黒板に「自習っ！！」と書く
男子生徒からエーと残念そうな声が響く
それほど朝比奈先生の授業が受けたい…いや、胸を拝見したいか

あと、俺を睨むな

この先生思いつきにも程があるぞ
「さー良哉保健室に行くぞ」
突然下の名前で呼ばれドキッとする

保健室に入るとやはり二人きりになった。
まあ、一時限目からここに用のある奴は居ないだろうが
「上着脱ぎな、あと上履き脱いで身長測る台に乗って」
言われるがままに身長測る
「んー…アンタいつの間にかデカくなったわねー」
「まあ、千鶴姉(ちづるねぇ)が就職してからそんなにあってなかったからね」
「あ、懐かしい千鶴姉って呼び方！」
「まあ、いくら従姉でも学校だからね、そうそう呼べないよ」
そう、朝比奈先生は俺の母親姉妹の娘で俺の親戚のお姉さんに当たる人だ
少し前に教師になったと聞いたがまさか俺の担任だとは思わなかった。
しかもこんなにも美人になって

「沙希ちゃん、元気そうね」
「そうだな、今朝も笹本を一体撃破したところだ」
「何体もあいつがいたら堪ったものじゃない」
ふと、千鶴姉は黙り込む

「あの様子だとまだ沙希ちゃんは【あの事】を知らないの？」
突然千鶴姉は、声のトーンを落とした。
【あの事】とは俺の現在の最大の悩みだ。
簡単には口外も出来ず心の中で悩み続けていた。
「うん」

「彼女もそろそろいい年よ？教えてあげなくちゃ」
「分かってる、けど、まだ何て言えばいいのか分からないんだ」
「ヘタレ」
「うっさい」
この問題は俺だけで決めていいことじゃない
だけど、沙希は感が昔から冴えている。
頭では分かって無くても沙希は本能な部分で感じているみたいだ。
もうごまかせないだろう。
時間の限界は近いが…それを恐れている俺がいる。

その時、ふと身長をはかるために隣に立つ千鶴姉に気付いた
「ここからじゃあメモリ見えないな」
身長の大きい朝比奈先生でも男の俺よりは低い
気がつくとメモリを覗こうと先生は俺にしがみ付く様にしていた
大きな胸が俺の素肌に押しつけられフニャリとゆがむ
元々ジャージは生地が薄いのにあｑｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ

駄目だ、頭が回らない
兎に角今は宜しくない
俺の「息子」が元気になっちまう
「ちょ、先生、先に体重測ろうぜ」
「んー、そうだな面倒だし」
人の気も知らないでクルッと後ろを向いて体重計を出してきた
俺が体重計に乗ると体重をメモし終わりかと思うと…
「良哉って脱ぐと凄いわよね」
「教師のセリフじゃねぇ」
「胸のあたりなんか筋肉が結構あるわよね」

「そう？普通だと思うけど」
「ほら、ココなんて」
「ひゃっ！？どこ触ってんだよ！！」
ヘソの辺りをなぞられ声が出た。
「ふふふ、意外とかわいー声で鳴くのねぇ」
「千鶴姉ってサド？」
「良哉がマゾならなろうか」
くすくす笑いながらさらにくすぐってきた。

その時、教室の外では
「ちょっと！リョー兄ってば何を！？」
「ふむふむ…前々から二人は親密だったが、道理で」
沙希と笹本の二人が保健室の扉に耳をあててていた
笹本は何かを手帳にメモしていた
沙希は顔を真っ赤にしながらそれでも耳を離さない
『胸のあたりなんか筋肉が結構あるわよね』
『そう？普通だと思うけど』
『ほら、ココなんて』
『ひゃっ！？どこ触ってんだよ！！』
『ふふふ、意外とかわいー声で鳴くのねぇ』
『千鶴姉ってサド？』

『良哉がマゾならなろうか』
そんな会話が聞こえた
ブチン
「ブチン？」
笹本は聞こえたゴムが千切れたような音に顔をしかめた
振り返って沙希を見ると指がメキメキッと保健室の扉にめり込み始めていた。
顔はまだ真っ赤のままだ。

「お、落ち着け赤坂妹よ、流石に今の顔は兄に見せられないぞ」
言われてハッとする沙希
また熱心に耳をあてる
「しかし、朝比奈先生と良哉がこんなにも親密な関係だったとは…まさか、朝比奈先生の恋する相手は良哉か！？」
また必死にメモをとる
「むむむ…リョー兄ぃってば鼻の下を伸ばしてー！！」
「顔が見えないのに良く分かっ――――オゴ」
脳天に強烈な一撃を貰い悶絶する笹本
握りコブシを解く沙希

『ちょっと！？千鶴姉！？』
『良哉って本当におっきいね…ビックリしたぞー昔同じお風呂に入ってた時はあんなに小さい良哉がこんなになるなんて思わなかった』
『俺だって男だぞ？そりゃデカくなるさ』
『ふふ、そうね、これからが楽しみだね』

ピーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！（発禁音

じゃないよ！！）

そんな会話が聞こえて沙希の頭がヤカンのように湯気が見えた
おもわず笹本も声をあげて驚いた
「おわ！？」
「ににに、兄ぃーーー！！」
扉を蹴破って中へ突撃
「いや、今のは身長の話だろう…少し冷静になれば分かるだろうに」
笹本は肩をすくめる
ただ、今保健室は面白いことになっているだろう
これを放っておけない

笹本は楽しそうに保健室に入っていくのだった。
中ではどんな修羅場になっている事やら。

～ハジマリノウタ～（後書き）

――――――――――――――――――――あとがき――――――――――――――――――――

いやー
勢いで書いてみたら面白くてドンドンかけました！
とりあえず恋愛ものっていうイメージで描いていきます
元々恋愛ものは自分のテリトリー外なので違和感バリバリですが
がんばってみますんで読んでください。

オモイノカタチ（前書き）

ホシノウタ

第一章

カタチ作り編

オモイノカタチ

「兄ぃ！！起きてよ！！！」

朝突然布団が剥がされる
その反動で俺は顔面からベットから落ちる。
「ヒギィ！！鬼かお前は！？」
「もう7時だよ？おきなくちゃ」
時計を見ると6時４０分をさしたばかりだった
「う、うそつき！！まだ7時じゃないじゃん！！」
何で世の中のお母さん達は起こす時間を繰り下げるんだ。
「あのねー家がいくら学校に近いって言っても２０分近く歩くんだよ？朝ごはん食べる時間もあるんだから」
「なら朝ごはんを食べなきゃいいじゃない」
嗚呼、なんてマリー・アントワネットな俺
すると沙希はシュンと寂しそうな顔をした。
「そんな、毎朝ご飯作ってるのに…」
しまった
今のは完全に失言だった。
いつも沙希は俺より早く起きて朝食を用意してくれている。
ついつい眠いとこんな気の利かないセリフを吐いてしまう自分を呪いたくなる。

「ま、まあ…腹が減っては戦(イタズラ)は出来ねえから食べさせて頂くよ」
「今不穏な事が聞こえた気がしましたが…まあ、いいでしょう」
ふん、と腕を組んで背中をピンと伸ばした
おぉ…生徒会モードか
いつものように調子が戻ったようで安心した。

階段を下りて朝食をとる
トーストにサラダ、コーヒーを飲みながらの朝はかなり目が冴える。
元々朝ごはんをあまり食べられない自分にとってとてもありがたいメニューだった。
「…あれ？沙希はご飯派じゃなかった？」
「べ、別に今日はアッサリにしようと思っただけです」
「そう？まあ、俺は助かるからいいけど」
俺は朝食を済ませて玄関に向かう。

「あ、リョー兄ぃ」
「ん？」
「今日から一週間帰り遅くなるから」
「？何かあるの？」
俺の質問に戸惑うように目をそらす
沙希の癖だ
何か都合が悪くなると目線をそらす。
「…まぁ、アブナイ事じゃなければいいけどさ」
「うん」
それだけ言ってこの会話をやめた
聞いても答えてくれないし、何より兄妹でそこまで干渉しあうのは何か違うような気がする
通学中では他愛のない会話だけをして登校した。
だが、何故かあの時の困ったような影のある沙希の表情が気になって何を話したか覚えていなかった。

一日授業中何も変わることなく過ごすことになる。
それどころか妹ばかり見て授業で何度怒られた事か。

放課後の校門で呆けていると
「なにかあったのか？」
笹本が缶コーヒーを飲みながら歩いてくる
もう一本を俺に差し出すと隣に座る。
「いや、大した事じゃないんだが…沙希の奴が何か様子がおかしいんだ」
「ほぉ？赤坂妹が…具体的には？」
「一週間帰りが遅くなるって言われた」
「…――――だけ？」
「だけ」
すると盛大にため息を吐いて笹本は立ち上がる
「お前は思春期の娘をもったお父さんか、大方―――彼氏でも出来たんだろう」
「な、なにぃ！？」
聞き捨てならない笹本の言葉におもわず缶を握りつぶす
「おま、それスチール缶…」
「っと、落ち着かねば」
そう、だよな
沙希だって１７歳
好きな男の一人や二人いてもおかしくはない。
むしろほほえましい事ではないか

でも、何だろうこの胸のざわつきは
「つまり、今日から放課後は暇なわけだ」
「ん？ああ」
「なら久々に」
そう言って銃を撃つ真似をする
それでああ、とうなずく
今俺と笹本でハマっているネットゲームで銃撃戦で戦うゲームだ。
「ならば再び南の地で会おう戦友よ」

「俺は根なし草の傭兵だ…お前と戦うことになるかもな」
校門でコブシを突き合わせそのまま帰路に着いた
自宅に帰るなり俺はゲーム機に電源を入れた
ヘッドセットを使い無料通話をかける
相手はもちろん笹原
『よ』
「じゃあ始めるか」
それから二時間苦戦を強いられながら長い長い戦いを続けた。

○　○　○　○　○

時計をふと見るればすでに8時を回っている事に気がついた。
「もうこんな時間か」
『結局ゲーム中に帰ってこなかったな赤坂妹は』
そういえばそうだな
普段なら「こんな時間にゲームしないでお風呂に入っちゃって」
と言われている時間だ

まだ帰らないのか？
いくらなんでも遅すぎだ
その時脳内でいやな妄想が流れた。
〜〜〜〜〜
「あ、兄ぃ？今日カレのところに泊っていくから」
「え、ちょ」
「あたしも子供じゃないんだよ？」
「う」

「じゃーねー」

〜〜〜〜〜〜

妄想終了

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

『うぉ！？急に叫ぶな！』

いやだ！

妹とそんな生々しい会話はしたくない！！

俺は笹本の返事を待たずゲームを切り玄関に向かう

何処にいるか分からないがとりあえず町の中走り回ってでも探し出してやる！

ジャケットを羽織って靴を履きドアを開けようとした時

ガチャ

「え」

「きゃ！？」

目の前の扉がひとりでに開いた

まぁ、正しくは沙希が開けただけなんだが。

「兄ぃどこかに行くの？」

「あ、お…お帰り」

「ただいま」

俺は振り返って室内に戻る

首を傾げながら沙希も同じようにリビングに入ってくる。

良かった、変な妄想のせいで冷静に判断できなかったが

そんなのは杞憂に過ぎなかった

ほんとによかった

まて、なんで俺はこんなに動揺しているんだ？

「兄ぃ」

「うひゃい！！」

「何変な声出してんの？…まぁいいや、夕飯は済ませているの？」

何事もないように話をかけてくる。

今まで何をしていたんだろう？

気になるがそれを聞くのは失礼だろうか

プライベートに無意味に侵略するのは良くないよな。

いつもと変わらない沙希の姿

心なしか疲労を感じられる表情

俺は思いとどまり先に風呂に入る事を伝える。

湯船に浸かりながら天井をぼうっと眺める。

駄目だな…おれ

最近沙希を女の子として意識し始めてる

「沙希が俺の妹になってもう１２年か…そろそろの時期だよな」

沙希は５歳の時両親を事故で失っている。

父が沙希の両親と親しい友人だったとこの事で養子になった。

俺自身もなんとなく沙希を守らなくちゃと思う気持ちだけで良く分かってなかった。

同い年なのに沙希が「妹」になったのも俺の子供ながらの決意を汲んでくれた父の配慮だ。

だけど、この数年で沙希は本当に成長した。
女の子としても凄く魅力的になって、今じゃ俺の方が押され気味だ。
「親父…そろそろ話してもいいよな」
俺はポツリとこぼす
すると――――――

「兄ぃー湯加減はどうーー？？」
「ぶはっ！」

突然声をかけられおもわず湯船の中で溺れかける
ガラガラと戸が開けられる。
「ちょ！？」
「へへー、兄ぃの背中を流しに来ましたーー」
そこにはバスタオルを巻いた沙希の姿
「おおおお、おま、お前！少しは女の子としての羞恥心をなっ」
「大丈夫だよ！この下には水着着てるから！」
下から紺色の水着が見えた
「…お前、まさかスクール水着…か？」
「うん、そうだよ？」
「そんなんだからお前周りから子供――――」
顔面を殴られました

とりあえず俺は沙希のなされるがままに背中を流してもらうことになった。
「こうして過ごすのも久しぶりだよねー」
「そ、そうだな」
お前が中学入ったらすぐに俺を避けだしたんだろうがっ
高校に入ってまた仲良くなったがこれは流石に宜しくない。

「ねえ」
「ん？」
「兄ぃってもし好きな人ができたらどうする？」

キターーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！

今もっとも気になるうえに聞きたくない話だっ！！
「ん、あ、ああ…えっと、そうだな…とりあえずアタックするかな？」
「それが許されない相手でも？」
「あ、ああ…恋に制限はないからな」

何言ってんだーーー！俺が話したいのはそんな事じゃなくて…「お前最近帰り遅いのは彼氏ができたのか？」って居ない親父代わりに俺が沙希の素行調査をする事に合ってそもそも、俺たちは血がつながって居ないわけだから俺自身沙希の事最近可愛いなーとか思ってしまうくらいなんだから変な虫がついていないか確認するのも俺の仕事で、なにより大事な妹の幸せを願うのは当たり前な事だから当然相手の男に会って見極めたいと思ってて、もしそれがダメ人間で沙希を傷付けようものなら俺の全コブシを持って叩きのめしてやろうと心に深く深く誓いをだな――――。
「そう、だよね」
俺が一人悶絶していると沙希は妙に心に何かを決めたのかうなずいている。
心なしか目が少し潤んでいる。
む…そんなに許されない相手との恋なのか…これは、応援してやらねば。

相手が良い奴ならな！！！

そんな事を考えていると沙希はワシワシと背中を擦りだした。
「いだだだだだだだ！！」
顔を真っ赤にして無理やり擦るせいで泡の滑りを完全に無視する刺激が痛い

「痛いってば！！」
振り返って止めさせようとしたら泡で滑って椅子から転げ落ちる
「きゃ」
「おわっ！？」
ガシャン！！
沙希もろとも見事にすっ転ぶ

「てて…大丈夫か沙希？」
「うん…もう、兄ぃってば急に振り返るんだも…ん」
沙希は急に固まる
良く体制を確認すると俺は沙希の上に覆いかぶさる形になっていた。
とりあえず頭をぶつけない様に抱えていたおかげで沙希は怪我はないようだが目線は下を向いたまま固まっていた。
目線を追って下を向くと…

まあ、風呂に入ってたから当然布一枚で隠してたのに
転んだ反動でとれちゃって…まあ、その…アレだ

見えちゃってるんだよね

「き…」
「き？」
沙希の眼に涙が溜まる
余裕のある腕が振り上げられる
「キャァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」
「ヘブァ！！」
◎　りょうや　に　１０００　のダメージ！
「いやぁぁぁぁぁぁ！！！！」
◎　りょうや　に　１２０００　のダメージ！

それから俺は気を失った――。

南無三

オモイノカタチ（後書き）

ベタベタで慣れない恋愛表現が難しい…。
恋愛小説読んで参考にするかな…。

スレチガイノキモチ（前書き）

ホシノウタ

第二章

カタチ作り編

スレチガイノキモチ

目が覚めるとそこは見慣れない天井――――じゃなく、いつもの俺の部屋だった。
まあ、エヴァン〇リオンみたいな落ちじゃないよな。
しっかしまぁ、思いっきり殴ってくれやがって…しかも二回。
両頬がひりひり痛い。
「てか、いつの間に自分のベットに？それに服だって…」
俺は風呂で気を失ってからそれから…

「目が覚めた？」
「お、沙希おはよう」
「…」
顔を赤くしたまま目を合わせてくれない沙希はムスッとしたままずかずかと部屋に入ってきた。
何も言わないままこちらへ顔を寄せてきて
「ちょ。沙――――」

柔らかな感触
甘い香りが脳をくすぐり何も考えられなくなる。
キス、されていると気がつくのに数秒かかった
「ん、ふぅ」
目の前で目を閉じたままの沙希
やっぱり沙希は可愛いな…なんてことを考えながら呆けていると沙希はゆっくり離れていく
「えっと、沙希…？」
「じゃあ、委員会があるから沙希に学校行くね」
俺の返答を聞かずそのまま俺の部屋を出ていった。
それから俺は放心状態のまましばらく動けずにいた。

学校についても俺は呆けたままで授業内容なんて全く頭に入ってこなかった
何日たってもあの事が頭から離れなくて、数日間学校での時間を覚えていない。
実際何度か体育教師の村上に怒鳴られた記憶がある。
それが千鶴姉に見つかって指導室に連れて行かれていた
「赤坂君？何があったか知らないけどココ数日の授業態度問題よ？」

ふぅ、とため息を吐いて机に肘をついた
「ただでさえ教師組から良い目で見られてるわけじゃないのよ？
なのに、授業中盛大にため息を吐くわ、窓の外見たままで呼ばれても気づかない、授業中なのに勝手に教室を出ていくし」

そう
あの出来事から俺は全くまともな行動がとれずにいた
沙希と同じクラスなので向かい合ってしまうと突然に走って逃げてしまったり、沙希の視線から逃げるようにしてしまう
「…何があったの？いってごらん」

「別に」
「別に」

「っ」

「良哉…あんたは嘘をつくときスグに「別に」って言って目を反らす癖があるの知ってる？」

千鶴姉は呼び方を親戚の姉として変えてきた

教師から家族にシフトチェンジしたってところだろう。

「別に千鶴姉には関係ないだろ」

「なかったら何も言わないで上げるけど、流石に目に余るから言ってるの」

あの笹本すらあんたを見てびっくりしてたのよ？と付け足した。

ふざけた振りをしちゃいるが千鶴姉は本気で心配をしてくれている。

そんな彼女に対して隠すのは失礼じゃないだろうか？

俺は考えながら少しずつ相談を始めた。

「実は…四日前、沙希にキスをされちゃって…」

「ふーん」

そう言って俺を見た千鶴姉が少しずつ表情の変化をした。

「…ーーーッてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

俺に掴み掛らん勢いで突っ込んでくる

先ほどまでの先生オーラはいずこへ

「き、キスって当然唇！？」

「う、うん…それから気まずくって」

「気まずくって？」

「一度も話せて無い」

それを聞いた千鶴は大きく息を吸い込んで――――

「馬ッッッッ鹿じゃないの～～～！？」
先生は大きな声で怒鳴られた
「な、なんでだよ！？」
「アンタね、キスするって事はあんたに対しての気持ちの訴えでしょうが！！」
「でも俺たちは兄妹だぞ！？」
「血ぃは繋がって無いだろーがっ！！」
「沙希はまだ知らねーよ！」
そこまで言ってハッとする

血の繋がりの無い事実を知らない沙希にとってはあのキスはどんな重さを抱いていただろう
しかもそれだけの決意後に相手から避けられるような事があればどんなに辛いだろうか。
いや、でもあのキスはそういう意味を含むかどうかは…

「ねぇ、良哉？」
「？」
「本当にそのキスは兄弟間で交わすような安いものだった？」

もう一度思い出す
潤んだ瞳に何か決意の様なものを秘めた強い眼差し
それに風呂での会話を思い出す。

『好きな人が出来たらどうする？』

『許されない相手でも？』

あれは俺の事を指していたのか？

「――――ッ」

俺は立ち上がる

なんて事をしていたんだ！！

「ちょ、良哉！？」

「千鶴姉！！ありがとう！！」

良哉は走って指導室を後にする。

残された千鶴は静かに立ち上がりかけた腰を改めて椅子に落ち着ける。

「…良哉の奴いつの間にか男の顔をするようになったのね」

出て行った少年と言えない強い眼差しを持つ彼を思い浮かべおもわず頬が緩むのが分かった。

本当に、これは生徒への思いなのか

本当に、これは甥に対する思いなのか

それとも――――。

校門を出てから俺は、必死に走り先を探した。
会ってどうするのか？
想いに応えられるのか？
そして、俺との血の繋がりがない事を伝え結ばれるのか？

可能かもしれないけど、俺にはまだそこまでの覚悟がない
そんな俺が沙希に会いに行って解決に至るのか？

そう思うと走る足から力を失っていく
立ち止まるとそこは町の公園広場だった
噴水があるのが目印
「…ここか」

俺は静かに噴水の淵に腰をかける。
「何やってんだ俺」
勢いよく飛び出してもこうやってすぐに腰を抜かすヘタレ
自分の中で恥ずかしい
「沙希…俺…」
俯いていると目の前に影が出来る

「兄ぃ？」

「！？」
顔をあげるとそこには沙希が両手に買い物袋を持って立っていた。
「何してるの？」
「あ、あぁ、今帰りか？」
すると四日前と同じ優しい笑みでうなずく
まるで俺が沙希を避けていた事が嘘のようだ。

このまま

このまま過ごせればきっと

前と同じ時間が流れてくれるはずだ

そう思っていた

隣並んで歩く二人の帰り道

立った四日なのに何年も会って居なかったような久しい気持ちになる。

「ねえ、兄ぃ？」

「ん」

「私の事嫌いになった？」

その質問に固まる

顔が見れない

きっと俺はこの上に無いくらい情けない顔をしているにきまっている

こんな顔を見せたいとは思わない。

「そう、だよね」

だが沙希の声は少しずつ震えていく

涙を抑えるような

そんな声

「な、なぁ…沙――」

「うぅん！気にしないで！私たちは兄妹だもんね！あんなの挨拶程度だよ」

兄妹…だもん

そう、小さくつぶやく
やはりそうだ
沙希は俺との関係に気付いていない
にも関わらずああやって想いを伝えてくれている

なのにも関わらず何一つ返事のできない俺
「ねぇ…私……なんでもない」

そう言って走って見えなくなってしまった

それに対して俺はただ追いかけるわけでもなくただただ見守ることしかできないでいたのであった。
これから、どんな顔して沙希に合えばいいのか全く分からないまま、俺はトボトボ歩いて帰る。
夕焼けの空から降り注ぐオレンジの光

それが悲しい色に見えてくる

家に着くと沙希は何も言わず部屋に入ってしまっていた。
寝ているかも…思いながら

部屋の前に立ち語りかけた。

「沙希、今日はごめん沙希の気持ちに応える事が出来ていない…避けるような事もしてごめん。

出来る事なら今まで通りの関係で居られたら…そう思っていた。

でも、そうは行かないんだよな…でも、ごめん、まだ沙希に言っていない事があるんだ

だからこの事をちゃんと話してから――――」

言いかけるとバンッと大きく扉が揺れた

『何がまだ話していない事があるってのよ！！今更そんな言葉を言ってごまかさないでよ！』

「沙希！聞いてくれ！俺とお前は、本当は――――」

『うるさい！もうどっか行ってよ！！』

再び扉が揺れる

本か何かを叩きつけたようだ

「沙希…ごめん」

俺は沙希の部屋の前をゆっくり立ち去ることしかできなかった。

部屋の奥から

かすかに泣く沙希の声が聞こえてきて

胸の奥がギリッと痛むのを感じた。

ムキアウキモチ

2　あれから俺は丸一日沙希とは話すことなく過ごすことになった
今日は土曜日で学校は休み
　俺の優柔不断な行動が原因で沙希を傷つけてしまった。

「…俺どうしたらいいんだ？」
俺は自室の居るのも気まずくて公園を再び一人で過ごしていた。
あれだけ沙希に対しての強い公開を感じていたのに
いざ本人を前にしてしまうとどうしても何もできなくなってしまう自分がいる事に気がついた。
それは、今まで過ごしてきた時間が壊れる事を恐れる弱い心のせいだった。
沙希の事を嫌っている訳じゃないんだが俺と沙希の事実を教えたことによって兄妹らしい時間が無くなってしまうのが本当に怖い。
「俺はどういえば良いのか…なぁ」

その時携帯が震えている事に気がついた
画面には非通知と表示されていた。

「ん？もしもし」
『良哉か？』
「…親父？」
なぜ親父の携帯から非通知なのだろうか？

『どうだ？しばらく帰れてやれてないが沙希とうまくやれてるか？」
「…それが」
『なんだ、ついに手を出したのか』
ふざけた口調で親父はとんでもない事を言う

「手ェ出してねぇよ！！」
言い返すと電話越しに親父の声のトーンが下がったのが分かった
『お前には色々と迷惑をかけていると思う』
「なんだよ、突然」
『お前、沙希の事でなにかあったんだろう？』
親父は突然核心を突いてきた
そのあまりの的確さに声を失い息を飲む。
『…やっぱりか、なんか虫の知らせ？とでも言うのか…変な予感がしたもんで電話してみたんだが、どうやら当たりのようだな』
昔から変な事だけは感が鋭い親父だが今回は本当に驚いた。
「悪ぃ、でも理由は言えないんだ」
俺と沙希が変な関係になったりしたらきっと親父は飛んで家に帰ってくるに決まっている
それに今の状況に何一つ答えが出来ていないのに親父に相談するのは卑怯な気がした。

『そうか…なら大して親らしい事をしていない俺から一言』
「？」
『沙希を泣かす事はするな』
その言葉がズキッと痛む
既に沙希は傷つき、俺を避けてしまっている。
もう沙希の兄として振る舞う資格なんでもう無いのではないか？
小さな絶望の火が灯る
「…ああ、ありがとう親父」
心底己の愚かさに歯軋りをしてしまう。
「親父、そろそろさ…話してもいいよな？」
『事実か？』
「ん、あいつもそろそろ子供じゃないしさ」
『そうだな』

それだけ話して俺は早々に電話を切り上げた。
正直今親父と反しているような気分じゃない

沙希は俺との血の繋がりがない。
それは俺たちにはなんの隔たりはない
お互い本当に兄妹だと思っていた。
沙希に至っては事実俺を兄だと信じている。

にも関わらず俺を好いてくれている。

その気持ちは本当にうれしく思う

だけど、俺にはその気持ちに答える資格はないんだ。
何故ならーーーー。

その時見つめていた地面に人影が落ちる。
視線を上げると、笹本が立っていた。
「やっぱお前か」
手に持った缶コーヒーを手渡してきた。
それを受け取ると喉に押し込むように飲む。
「どうしたんだよ一人で」

「ん？いやちょっとな」
「考え事か、なるほどここ数日のお前の不可思議行動にはそれが原因か」
腕を組んでうんうんと頷く
こいつは昔から長い付き合いだが、本当に感の鋭い奴だと思う。
そういえばこいつとは生まれる以前に両親の付き合いからだから
笹本も幼馴染になる。
「そういえば、今年で１２年になるな」

「何が」
「沙希がお前の妹になってから」
「ーーーッ」
不意に言われた言葉に固まる。
ああ、そうか
こいつが幼馴染って事は「あのこと」も知ってるわけだ

笹本が沙希を名前で呼ぶのは久しぶりだ
「そ、そうだな」
「沙希にはもう伝えたのか？」
「まだだ」
そう言うと再びコーヒーを飲むと笹本は小さくため息を吐く。

「お前も随分悩んできただろう？そろそろ、お終いにしても良いんじゃないのか？」
「な」
「沙希の事で悩んできたことは知ってる…１０年以上もお前の苦悩は近くで見てきて痛いくらいにな」
「・・・」
「だがな、１２年前の出来事だ、沙希自身覚えていないだろう」
「覚えていない、ああ、そうだ！覚えていないさ！沙希は両親の記憶もない！
でもな、沙希はいつも知らない人の墓参りをするんだ！
その姿を見るたびに俺はアイツに泣いて謝り縋りたい気持ちでいっぱいになる！
だけど俺がそれをしちゃいけないんだ！」

俺の叫びを聞くと笹本は静かに肩に手を置いた。
「・・・お前は何でも背負いすぎだ」
「すまない、お前の言うことも正しい、けれど少し・・・考える時

間をくれ」

ベンチから立ち上がりその場を後にする

「ふぅ、兄も妹も本当に難儀な正確だな」

ため息を吐きながら彼の良くも悪くも理解者である友人は、コーヒーを飲み息をつくのだった。

町の雰囲気に良く合う路上に流れる楽しげなＢＧＭを聞きながら歩き続ける

すると向かいから歩く女の子を連れた三人家族の姿が目に入った。

その姿を見ると少し、悲しい気持ちになる。

（沙希の両親が居れば今頃あんな風に買い物にも行けていたんだろうか）

そんなことを考えるとあの日の出来事がゆっくりと蘇って来るのが分かった。

１２年前

当時俺はまだ5歳で、覚えていることは限り少ない僅かな事くらいだ

だけど一つだけハッキリと覚えている事がある

それは、沙希が俺の妹になった事だ。

本来、俺と沙希は両親同士が古い友人で
兄妹同然に過ごして来ていた
だから
全く違和感が無かった
近くに居るのが当たり前に思えていた。
でも、ある日沙希の両親が海外へ引っ越すという話を聞いてしまい俺は引越しの前日にとんでもない行動に出た。

『沙希！一緒に家出しよう！』
『えぇっ・・・でも、おかーさんとおとーさんが』
『沙希は俺と離ればなれになっても良いのかよ！』
『…やだ』
『じゃあ行こう！沙希！』

そんな、他愛も無い大人への反抗が
今では本当に妬ましい
あの時、あんな事を思わなければきっと「沙希の両親は死ななかった」
夏の夕暮れ
日の高い夏で辺りが暗いという事は相当遅い時間なんだろう
俺は沙希の手を引いて商店を歩いていた。
『良お兄ちゃん…お腹すいたよ～』
『ん・・・、そうだな』
当然子供の俺には小遣いすら無く、ポケットに入れた飴玉数個程度だった。
それを沙希の手に渡すと輝いたように笑顔になる。
『やったぁ！』
『もう少しの辛抱だから、がんばろうな』
『うん！』

そんなやり取りが本当に幸せだった
そんな時間が失われるのかと思うと心が軋むのが分かった
俺は、沙希が大好きだった
恋愛なのか、それとも兄としての気持ちが芽生えていたのか
分からないけれど俺は沙希を手放したくないと強く思っていた。

『お前は、俺が守るからな』
『うんっ！』
俺はギュッと繋いだ手を少しだけ強く握った。
今日一日だけでも、沙希を手放さなければ明日も今日と同じ一日が待ってる
そんな気がしたから家出を考えた。
当然今思えばもっと違う講義は出来た筈だ。
だけど、当時の俺にはそんなことを考える暇は無く
ただただ、強がりに良く似た誓いを何度も心で呟くのだった。

手を引いて歩くと正面に交差点脇の横断歩道が見えた
その向かいの歩道から手を振る影に気がつく
その影は、沙希の両親、そして少し離れた所に俺の両親だった
『あ・・・』
『見つかっちゃったね良お兄ちゃん』

沙希の言葉が耳に入る
沙希は俺を見ながら少し残念そうに笑う

目線は沙希の両親
沙希が目線を戻し、両親に手を振ろうとしたその時轟音が響き渡る。

キキィィーーーー！

鼻にツンと来るようなゴムの擦れた臭い
ブレーキ音が木霊の様に響いたかと思うと、次の瞬間一台の車が
信号待ちの歩行者に突っ込んだ
『え』
沙希は呆然としたまま動かない
車の突っ込んだ中央には、沙希の両親が居たのだ。

『さ、沙希！』
俺は沙希と呆然と固まる

しばらくすると辺りは騒然とした
悲鳴と泣き声
親父が車の影から少しの傷を負ってはいたものの無事のようだった
ホッとした瞬間、固まった
ひしゃげた車の陰だと思っていた黒いものが少しずつ広がっていく
親父は走ってくるなり俺と沙希を強く抱きかかえた
『見るな！見ちゃだめだ！』
俺と一緒に抱えられる沙希の様子がおかしいことに気がついた
『おか…さん？おとー…さん？』
『母さぁぁん！！』
『おとーさん！おかーさん！』
泣きながら、親父の腕からすり抜けて車の近くまで走る。
少し近づいた時、沙希は固まったように動かなくなる
目線の先には、すでに息の無い先の両親の姿だった。
『――――――ッ！』
声にならない叫びを上げて気を失う

後日、車の運転手は飲酒運転の男だったらしい。

事故に巻き込まれた母さんと沙希の両親は即死、だったらしい
親父があんなに泣いていたのはソレ以来見たことはない。
俺も悲しみに泣き叫びたい気持ちがあったが、沙希を思うと泣いていられない気がして気丈に振舞った。

さらに言えば、先は今回の一件に関わる一連の記憶を失った。
医師には精神的ショックを和らげるために自ら記憶を封じてしまった可能性があると診断された。
俺と親父は今回の事は沙希自身の心が安定するまで秘密にする約束になった。
両親を失った沙希を親父は、養子として迎え入れることにした
すべてを忘れた沙希は俺を本当の兄と信じ、
そして沙希は俺の妹となった。

ふと、昔のことを思い出していた事に気が付いた。
時計を見ると時間は、7時を指していた
ああ、あの時もこのくらいの時間だった

そう思いながら道をトボトボ歩いていると交差点の向こうに沙希を見つけた
まだ、俺に気づいていないのか少し憂鬱気味な表情が伺える
きっと原因は俺のことだろう

ドクン

心臓が高鳴った
いやな高鳴り方

恋みたいな甘酸っぱい感覚じゃない
そう、焦燥感に近い
なんだろう、これは
どこかで見た感覚だ
ついさっきまで考えていたこと？
でも、それは・・・

気が付いた時には走り出していた
「あの日」と同じように歩行者が居るにも関わらず…
人が歩いているにも関わらず…止まらない
一台の車

駄目だ…駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ！！
俺が！守るって決めたんだ！！

必死に走る
少しずつ距離が縮まる
だげどまだ足りない
沙希も俺に気が付いたのか驚いた顔をしている
「沙希ぃぃ！！」
思いっきり飛び掛るように沙希を突き飛ばす
その直後強い衝撃が襲う

目の前が滅茶苦茶にかき回されたみたいに全てが目で追えない
暫くして、自分が地面にたたき付けられていると気が付いたのは
自分の血で赤くなっていくアスファルトを見てからだった。

「・・・！！」
沙希が遠くで叫ぶ、

無事を確認すると自然と笑みが浮かんだ
自分のほうが重症なのに、本当に安心した。

良かった
俺はまた、大切な家族を失うところだった。

安心すると意識は暗転してしまった。

ムキアウキモチ（後書き）

若干シリアス入れてみました。
次回で取り合えず第一章？簡潔予定です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5992x/

ホシノウタ

2011年11月24日02時52分発行